

令和4年3月1日発行 通巻219号
Newsletter of the Kanagawa Prefectural
Museum of Cultural History

神奈川県立歴史博物館



MAR. 2022 Vol.27 だより No.3



当館による間口洞窟遺跡発掘調査の様子（1971～1973年）

間口洞窟遺跡のなぞと魅力—特別展「洞窟遺跡を掘る—海蝕洞窟の考古学—」によせて—	2
中世唐物仏具から考える工芸展示	6
THE けんぱく PUNCH 神奈川県博を支える“デザイン”	8

三浦半島の手蝕洞窟遺跡

神奈川県の手東端、東京湾と相模湾を隔てる三浦半島。その海辺は穏やかな砂浜海岸と複雑なリアス式海岸が入り組み、海に面した急峻な崖には、波の浸食により生じた洞窟—手蝕洞窟—が多く見られます。海面付近で形成された洞窟は、その後、土地の隆起によって離水し、人々にとって格好の活動空間となりました。三浦半島の手蝕洞窟には、過去の人々の痕跡が残る洞窟—洞窟遺跡—が多く存在し、全国でも有数の洞窟遺跡密集地となっています【図1・2】。

これらの洞窟遺跡に残された過去の人々の痕跡は、いつ、どんな人たちに、どのように利用されたことによって残されたのでしょうか。そんな疑問にこたえるべく、今から半世紀前、当館（当時は神奈川県立博物館）は三浦半島南端にある一つの洞窟遺跡で発掘調査を試みました。弥生時代から古墳時代の土器とともに出土した釣針やアワビの貝殻で作られた道具、サメの歯の加工品などは、海とともに生きた人々の姿をおぼろげながら私たちに伝えてくれました。

2022年春、これらの手蝕洞窟遺跡を主な舞台にした特別展「洞窟遺跡を掘る—手蝕洞窟の考古学—」を開催予定です。ここでは、当館が発掘調査した洞窟遺跡を中心として、これまでに行われてきた調査や研究をご紹介します。

間口洞窟遺跡と赤星直忠—ト骨の発見—

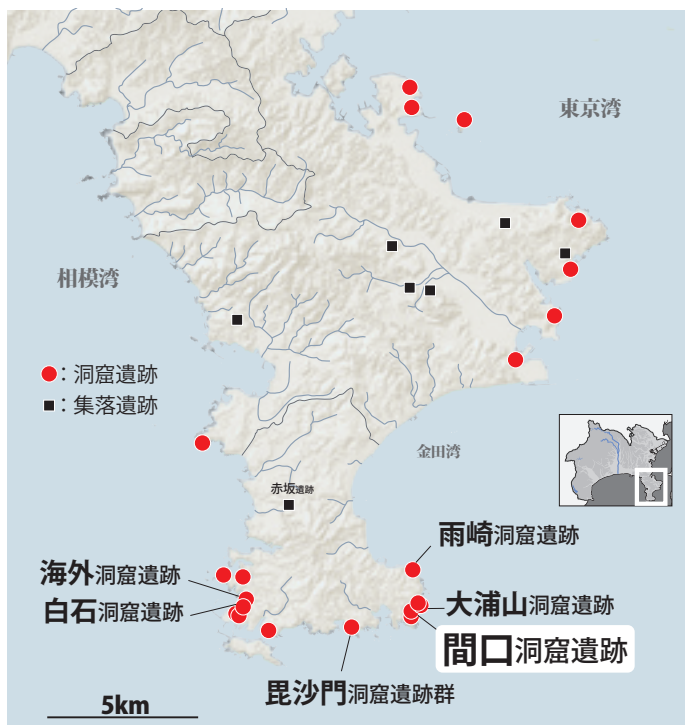
三浦半島に洞窟遺跡があることを発見し、最初に調査したのは赤星直忠さんです。戦前、小学校の先生などをしていた赤星さんは、仕事のかたわら、三浦半島をくまなく歩きまわり、考古学的調査を行っていました。戦後、赤星さんは自らが率いる横須賀考古学会とともに、いくつかの洞窟遺跡で発掘調査を実施します。1949年～1951年のことです。洞窟内部に堆積した土層からは、弥生時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代、江戸時代といった複数の時代の遺物が出土しました。その中でも弥生時代から古墳時代にかけての遺物が大半を占める洞窟遺跡が多く、この時期に積極的に洞窟が利用されたことが分かってきました。

そのような洞窟遺跡の一つに間口洞窟遺跡（三浦市）があります。間口洞窟遺跡では、弥生時代の土器とともに、点々と焼け跡が残る鹿の骨が見つかり、赤星さんはこれを骨占「骨ト」に使用した骨（ト骨）だと即座に推察しました【図3】。

骨トは日本列島で古来より執り行われてきた祭事と考えられており、3世紀末に記されたとされる「魏志倭人伝」（中国の歴史書『三国志』に含まれる「魏書」東夷伝倭人条の通称）や8世紀前半に編まれた『古事記』や『日本書紀』に、その様子が記録されています。「魏志倭人伝」には「挙事行来有所云為輒灼骨而ト以占吉凶」（行事や旅行にあたっては骨を灼いて吉凶を占う、というような意味）とあり、骨を焼く吉凶



【図1】 三浦市毘沙門洞窟群の前に広がる海（2021年7月撮影）



【図2】三浦半島の主要な遺跡分布（弥生時代）

占いが頻繁に行われていたことがうかがわれます⁽¹⁾。

文字で記されたこのような風習を、実際の出土遺物で初めて確認し、それが弥生時代中期（今からおよそ2,000年前）にまでさかのぼることを明らかにしたのが、赤星さんら横須賀考古学会による間口洞窟での発掘調査でした。このときに出土したト骨は、赤星さんからお譲りいただき現在は当館が所蔵しています。

神奈川県立博物館による発掘調査

1967年、当館の前身である神奈川県立博物館が開館しました。開館後、考古分野では赤星さんの研究成果を引き継ぎ深めるべく、間口洞窟遺跡の発掘に取り組むこととなりました。1971年3月から1973年8月まで、5回の発掘調査を実施し、多くの資料、多様な知見を得ることができました【図4・表紙】。発掘は、当館の初代考古担当学芸員の神沢勇一さんが中心となり、神沢さんとともに考古分野を担当していた



【図3】国内で初めて確認されたト骨
[間口洞窟遺跡、
1949~1951年・赤星直忠氏調査]（当館所蔵）

学芸員の川口徳治朗さんも加わりました。既に還暦を過ぎ、人文分野の相談役として当館に在籍していた赤星さんもたびたび現場を訪れました。赤星さんによる過去の調査と同じように、当館による調査でもト骨をはじめとする弥生時代から古墳時代に属する遺物が多く出土しました。

(1) 海へのまなざし

当時、弥生時代には大陸から稲作農耕がもたらされたことで、人々は縄文時代までの狩りや漁、木の実の採集を中心とした暮らしから⁽²⁾、水田での米作りに精を出すように変化したと考えられていました。

そのような中、間口洞窟遺跡からは大型の魚を獲るのに利用されたいし鉾や釣針、アワビの貝殻を素材にした道具、サメの歯の加工品、三宅島より南の伊豆諸島でしか入手できないとされる貝—オオツタノハ—を素材にした装飾品などが出土し【図5】、弥生時代になっても人々が海へ繰り出していたことが明確になりました。大型の魚を突いて捕獲する刺突漁や、深く



【図4】当館による間口洞窟遺跡発掘調査の様子（1971~1973年）



【図 5】当館による間口洞窟遺跡発掘調査出土資料（当館所蔵）
 左上：骨や角製の道具 右上：アワビの貝殻製「貝包丁」
 左下（左）：オオツタノハ製の貝輪 左下（右）：ト甲

まで潜水する必要のあるアワビ採集、そして三宅島以南に生息する貝を求めた航海などは、一朝一夕で習得できるような技術ではなく、専門的技術をもった人々の存在を考えたいです。中でもオオツタノハは、岩場に貼り付いている際には表面も藻に覆われていることが多く、見つけること自体が困難な上、波当たりの非常に激しい潮間帯の中部～下部に生息するため、捕獲するのは命懸けの作業となります⁽³⁾。そのような貝殻を素材にした装飾品を流通させていた人々は、伊豆諸島を行き来する航海技術に加え、貝の捕獲にも卓越した技量をもっていたことがうかがえます。

（2）貝包丁と「しましまの層」

深く潜水して入手したであろうアワビの貝殻を使用した加工品では、横長で二つの穴がけられたものが多く出土しました【図 5 右上】。同様のものは横須賀考古学会による調査で初めて発見され、赤星さんが「貝包丁^{かいぼうちよう}」と名付けています。名前の由来は、稲の穂積みの道具「石包丁^{いしぼうちよう}」と形が似ていることです。当館による調査でも、弥生時代中期から後期の堆積層より貝包丁が大量に出土しました。

ただ、貝包丁の用途は未だによく分かっていません。赤星さんは、石包丁との形の類似から、機能も同様と考え、穂積み

の道具として内陸の集落と交換するためのものと考えました⁽⁴⁾。それに対し、当館学芸員だった神沢さんは異論を唱えます。貝包丁に残された細かな使用痕跡を観察した神沢さんは、これが海藻を摘むための道具ではないかと考えました⁽⁵⁾。海藻は製塩の材料に用いることを想定していたようです。

神沢さんとともに発掘に携わった学芸員の川口さんは、神沢さんの論を別の側面から補強します。洞窟内に堆積した土層です。間口洞窟では、灰と炭が交互になった「しましまの土層^{しましまのどくわ}」が堆積していました【図 6】。川口さんは、宮城県の鹽竈神社^{しおがま}に付属する末社・御釜神社^{おかま}で行われる神事「藻塩焼^{もしおやき}」を参考にして、この白黒の層は塩作りのために生じた灰と炭が堆積したものと考えます⁽⁶⁾。この神事では、海藻に海水をかけ、天日干しで乾かすことを繰り返し、その後、海藻を燃やし、生じた灰の塊を海水に溶かし、それを濾してから煮詰め、製塩するという工程があります。間口洞窟の灰と炭の層は、このような塩作りを頻繁に行った結果



【図 6】交互に堆積した白黒の層 [間口洞窟遺跡、1971 年・当館調査]

に生じたもので、そのために必要な海藻を貝包丁で刈り取っていたのだと川口さんは考えたのです。

一方、赤星さんの流れを汲む横須賀考古学会では、この「しましまの層」は、洞窟内の除湿に用いられたのではないかと想定しています⁽⁷⁾。

貝包丁や「しましまの層」は間口洞窟遺跡だけでなく、周辺の高砂洞窟遺跡からも見つかっています。今後、それらとの比較も行いながら研究を進めていくことで、新たに見えてくる視点があるかもしれません。

(3) ウミガメの骨を使った占いの発見

弥生時代のト骨は、赤星さんによる調査で初めて出土しました。当館の調査でも、弥生時代中期から後期の堆積層からト骨が出土しましたが、さらに古墳時代後期の堆積層からはアカウミガメのお腹の骨を用いた占い道具「ト甲」^{ぼっこう}が国内で初めて発見されました【図5左下(右)】。亀の甲羅を焼く占いは「亀卜」^{きぼく}と呼ばれ、天皇家の儀式や国家的な事柄に関する占いの風習とされています。その風習の系譜が古墳時代後期にまでさかのぼり得ることを初めて示した出土事例となりました。

三浦半島の洞窟遺跡出土資料、大公開！

ここでは全部を紹介し切れませんが、他にも間口洞窟遺跡では多くの貴重な発見がありました⁽⁸⁾。

赤星さんや横須賀考古学会による調査の出土資料の一部は、当館が県立博物館として開館する際にお譲りいただき、当館の重要な資料となっています。それらの資料と当館による発掘調査出土資料は、三浦半島に特徴的に分布する高砂洞窟遺跡特有の資料群として、2001年に県指定重要文化財となりました。

これまで、間口洞窟遺跡の出土資料は、その一部が展示や報告書等で紹介されてきましたが、全貌が公開される機会はありませんでした。発掘から半世紀、この度の展覧会では、500点を超える全ての出土資料を展示します。また、三浦半島の間口洞窟以外の洞窟遺跡や洞窟以外の遺跡から出土した資料もあわせて紹介し、より複合的な視点でこれらの遺跡に触れていたでく絶好の機会となるでしょう。

当館の発掘調査から今年で50余年、赤星さんら横須賀考古学会による発掘調査からは70余年が経ちました。しかし、間口洞窟遺跡をはじめ、三浦半島の洞窟遺跡には現在でもまだまだ分からないことが山積みです。2022年の展覧会では、今日的な研究成果を踏まえ、皆さまとともに、改めてこれらの洞窟遺跡群に向き合ってみたいと思っています。

【註】

- (1) 佐原真『魏志倭人伝の考古学』1997年 歴史民俗博物館振興会。国営吉野ヶ里歴史公園が運営するウェブサイト「弥生ミュージアム」でも「魏志倭人伝」の概要を画像とともに見ることができます。

[<http://www.yoshinogari.jp/ym/topics/index.html>]

- (2) 今では縄文時代にも一定の栽培が行われていたことが明らかになっています。

小畑弘己『タネをまく縄文人：最新科学が覆す農耕の起源』2016年 吉川弘文館など

- (3) 忍澤成視『貝の考古学』2011年 同成社

- (4) 赤星直忠「高砂洞窟—三浦半島に於ける弥生式遺蹟—」『神奈川県文化財調査報告』20 1953年 神奈川県教育委員会

- (5) 神沢勇一「貝包丁に関する二三の考察」『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』3巻 1970年 [<https://sitereports.nabunken.go.jp/71048>]

神沢勇一「貝包丁の再検討—神奈川県三浦市間口洞窟遺跡出土例を中心に—」『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』9巻 1981年

[<https://sitereports.nabunken.go.jp/71052>]

- (6) 川口徳治朗「三浦市間口洞窟遺跡出土の貝製利器の検討」『横須賀考古学会研究紀要』第4号 2016年

- (7) 横須賀考古学会編『三浦半島の高砂洞穴遺跡』1984年

- (8) 当館の間口洞窟遺跡発掘については、以下の報告書が刊行されています。

神奈川県立博物館編「間口洞窟遺跡(1)～(3)」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』第6号～第9号 1972～1975年

[<https://sitereports.nabunken.go.jp/22856>]

なお、この文章は、当館ウェブサイトに掲載している「今月の逸品—三浦市間口洞穴遺跡と神奈川県立博物館の発掘調査」(2021年2月)をもとに、展覧会の内容に合わせて改稿したものです。

[https://ch.kanagawa-museum.jp/monthly_choice/2021_02]

(ちば つよし・主任学芸員)

2022年度開催予定 特別展

洞窟遺跡を掘る

—高砂洞窟の考古学—

会期：2022年4月29日(金・祝)～6月26日(日)

休館日：毎週月曜日

中世唐物仏具から考える工芸展示

佐藤 登美子

ある日展示室で

昨年のあるとき、常設展示室の一角、いつもはあまりやきものなどを展示しない場所に、青磁の香炉を置いてみました。展示ケースの外から眺めてみると、なぜか、思いのほか、しっくり来るような手応えをおぼえました。それは、掛幅の蘭溪道隆像（複製）の前でした。はからずも、蘭溪さんに香を捧げたような格好となり、そして、今までの工芸展示に欠けていたのは、こういう視点であったと思い至ったのでした。

中世部門の工芸品には、唐物仏具を多くそろえています。特に、中世都市鎌倉に舶載された中国製の青磁・白磁や彫漆器、それを模倣した日本の瀬戸焼や鎌倉彫を、大きな展示の柱として、コレクションが形成されてきました。そしてどうやら、歴代の学芸員達は、陶磁器、鎌倉彫、などという分野ごとの関心を強く持って作品を収集していた模様です。また、これは当館に限ったことではありませんが、古い工芸品を1点1点の美術品として鑑賞しようとするため、本来の用途や置かれた環境から切り離して展示する傾向が強いのです。それは近代的な学問や博物館展示のあり方なのですから・・・。

当館の唐物仏具コレクション

さて、当館の博物館収蔵システムを検索すると、香炉や花瓶がたくさん出てきます。代表的な例をあげると、青磁浮牡丹文瓶【図1】は、中国南宋時代に龍泉窯で作られた花瓶です。丸く膨らんだ胴部には型抜きで作った牡丹文を貼り、細い線でつないで唐草文としています。これと同様の形の花瓶は、称名寺や建長寺、鶴岡八幡宮にも伝わっており、中世の鎌倉に舶載された花瓶の中でも代表的な器形です。青磁袴腰香炉【図2】は、浮牡丹文瓶よりやや降った時代のものでしょうか、これも香炉としては代表的な形で、広い口と、横に膨らんだ胴、三つの脚が特徴です。円覚寺や清浄光寺にも袴腰香炉が残っています。そして、これらを仏の前で用いるときは、通常、「三具足」という三つの道具が揃っていないといけません。香・灯・華を仏に捧げるため、須弥壇の前には前机が据えられ、香炉を中心に、向かって右に燭台、左に花瓶を置くのを常としています。またさらに香炉の両脇に燭台一對、またその外側に花瓶一對を配して、

「五具足」とする場合もあります。現在では宗派を問わず広く行われている荘厳形式です。当館では上記の作例のほかにも、花瓶や香炉はかなりの点数を所蔵しているのですが・・・そう、わが神奈川県博には、「燭台」が足りないのです。今までの展示では、この三具足をバラバラにし、仏具を美術品として展示していたために、燭台がないことに、工芸担当の私は気づかず過ごしていたのでした。

資料に見る三具足

そもそも、中世の唐物仏具による仏前荘嚴のあり方はどんな風だったのでしょうか？常設展示室3階で工芸品のすぐ横にいつも展示している「仏日庵公物目録」（複製）を見てみましょう。仏日庵は、円覚寺の塔頭で、北条得宗家の廟所であり、この目録は貞治2年（1363）に仏日庵の什物を記した目録です。さまざまな絵画や器物が記されるなか、花瓶や香炉は、「古銅花瓶一對 香呂一ヶ」、「胡銅花瓶一双同香爐一ヶ」、「青磁花瓶一具 同香呂一」などというふうに記載されています。古銅（胡銅）というのは、古代中国の青銅器に倣って宋代～清代に作られた鋳銅製の器物で、中世の日本においては青磁同様に唐物として珍重されたものです。これらの記録から以下のことがわかります。

- ・花瓶と香炉がセットであること
- ・材質は古銅（胡銅）もしくは青磁であること
- ・花瓶は一對で用いられていたこと

おそらく花瓶一對と香炉の、3点セットで用いるのが基本的な形式であったのではないかと思います。また、燭台については、花瓶や香炉とひとまとめには記載されていません。ほかの様々な道具類が列記される中に、「同蠟燭臺一」（銅力）、「銅蠟燭臺二十四」、「白蠟燭臺四」などと書かれていて、銅もしくは白蠟とあるの



【図1】青磁浮牡丹文瓶



【図2】青磁袴腰香炉

でいずれにしても耐火性のある金属製の燭台です。花瓶一对と香炉に燭台一对を合わせ「五具足」として使用したのだろうか、と想像されますが、厳密なところははっきりしません。後世には香炉、花瓶、燭台で一具を成していた三具足が、この時期の円覚寺ではまだ成立していなかったようです。

一方、同時代の絵画資料に目を向けてみましょう。「^{ぼきえことば}慕婦絵詞」は観応2年(1351)に成立した真宗本願寺の三世・覚如上人の伝記絵巻で、寺院の内部の様子^{かくによ}が克明に描かれ、様々な器物が登場することでも知られています。一例をあげると、この絵巻の巻第10・第2段の覚如が病臥する居室には、阿弥陀の画像を掛け、その前に卓を置き、中心に青磁花瓶、向かって左に青磁香炉、右に銅燭台を配しています【図3】。その後の入滅の場面でも同じものが描かれています。ここでは香炉・花瓶・燭台の3点セットが登場していて大変興味深いものです。ただし後世の三具足と配置は異なり、さらに巻第8と第10でも香炉と燭台の位置が逆になるなど、三具足が成立する過渡期の様相を示しているものと思われます。

「仏日庵公物目録」には、唐物仏具が北条家の御内人や足利尊氏などにしばしば進物として渡り、散逸していくさまも記されています。唐物は、権威と権力の象徴としての力を持ち、贈答にも盛んに用いられていくようになるのです。南北朝～室町時代には、寄合の場に唐物を飾り立てる唐物趣味が流行し、また足利將軍家の御物が形成されていく中で、座敷飾として三具足の荘厳が確立していきます。武家文化の広まりにより、この荘厳形式が寺院の中でも一般化し、今日にまで続いているものと推測されます。

工芸展示のあり方は

さて、もし県博に、中世の仏前荘厳に欠かすことのできない、唐物銅器の燭台がコレクションとして加わったら、どのように展示すべきでしょうか。しかるべき仏画を掛け、その前に三具足を据えましょうか。それならできそう。あるいは、[●]一对の青磁花瓶があっ



【図3】慕婦絵詞第10巻・第2段『続日本の絵巻』9より転載

たら？せっかくなので、常設展示室3階の、円覚寺舍利殿模型内部の前机に「青磁花瓶一对、同香炉一」を置いてみましょうか。いや、露出で展示は無理だし、地震で転倒したらどうしよう、などと考えると、仏前荘嚴の再現は、課題が多いかもしれません。

そもそも、美術品をコンテクストから切り離して、それ単体で眺める、という態度は、近代という時代が獲得した自由だったのです。学問分野というカテゴリーごとに過去の遺物をバラして、白い壁を背景に1点1点鑑賞する。そうしてこそ私たちはなかなか目に触れられなかった宗教美術をつぶさに目にし、分析することができるようになったのです。だから私も、現代風の博物館の展示方法を大きく変えたりはしないだろうと思います。しかし、蘭溪道隆像の前に香炉を置いたときに味わった、眼と頭と体と心が一つに結ばれたような充足感を、忘れはしないでしょう。工芸品は道具である以上、本来ならば、動作や所作を伴うものです。あのとき、展示という行為が、香を捧げるという本来の道具に伴う行為と重なったのです。

そうやって私は、過去の時間と今を行ったり来たりしながら仕事をしていくのだろうな、と思います。なにしろ、工芸に携わる醍醐味は、古い形や技法材料が現代にも受け継がれ、今もそれを制作する職人達がいる、実際に使用する人達もいるところにあるのですから。私は最近、神奈川県博の神様はいると思うようにしています(日本は神仏習合の国なので、神でも仏でもいいのですけれども)。それは、この博物館に関わった人達の魂の総合体であり、また一つ一つの収蔵資料が内包する人類の記憶、そういうものが、県博の神様としてここにいるんじゃないか。そんな気がしています。工芸品を展示する、それは県博の神様の前に捧げ物をする、そういう行為だと思っようにしています。

(さとう とみこ・臨時学芸員)

参考文献

- ・古川元也「『仏日庵公物目録』成立に関する一考察」『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』第35号 2009年
- ・久保智康「中世日本における倣古銅器の受容と模倣—唐物意識の内実」『東アジアをめぐる金属工芸 中世・国際交流の新視点』勉誠出版 2010年
- ・古川元也「中世唐物考—記録された唐物」『唐物と東アジア—舶載品をめぐる文化交流史』勉誠出版 2016年
- ・高橋真作「北条得宗家と足利將軍家の御物—『仏日庵公物目録』をめぐる一試論」『美術フォーラム21』37号 2018年



神奈川県博を支える“デザイン”



博物館で「どのような展覧会を実施しているか」をまず何で知るでしょう。HPで知ること Alternatively、チラシやポスターを目にしてという場合も多いと思います。こういった展覧会毎の広報物のデザインは、外部制作に頼っている施設が多いのですが、県博は職員としてデザイナーがいる珍しいパターン。今回はデザインの現場をパンチの守が取材しました。

パンチの守（以下パ）：今回は広報物制作現場を見に来たぞ！ワターシが今の身なり（デザイン）で生まれたのもこの部屋じゃったのう。

デザイナー（以下デ）：元々はワグマンの描いた「ジャパン・パンチ」の表紙から姿かたちや色などを勘案して現在のパンチ部長のお姿になったんですね。

パ：ワターシの誕生秘話なんかも聞きたいところじゃが、今回は展覧会の広報物がどう作られるのかを見ていこうと思っておるぞ。作るにあたって気をつけていることがあれば教えてほしいのう。

デ：展覧会の規模や学芸員の動きにもよりますが、展覧会の3ヵ月くらい前から動き始めます。展覧会タイトルや見どころを聞き取るところから始めて、こういった展覧会を作りたいのかという想いを聞き取ることが重要な部分です。具体的なイメージがすぐ固まる場合もありますが、とても抽象的な場合もあります。

パ：具体的なときは色の指定もあったり、どうしてもこうしたい、という想いが強かったりすると聞いたの

う。抽象的な場合は逆にすごく大変そうじゃな。

デ：擬音だらけでの要望なんていうこともありますね。「展覧会是这样バツとして、スーッと並べる感じ」とか。「さわやかなイメージで」のような、何通りも作れそうな要望もあります。

パ：そこから細かな希望を引き出していきつつ、デザインを完成させるところが腕の見せ所じゃな。要望を引き出して、そこからデザインをするときに気をつけていることはあるかのう。

デ：デザイナー一辺倒にならないように、ということと、展覧会によってテイストをガラッと変えるようにしていることでしょうか。以前、忠臣蔵の展覧会のデザインを作った際に赤いしずくをデザインに入れたんですが、「血を連想させて討ち入りっぽすぎる」ということでNGになりました。デザイン的要素だけでなく、ご覧になる皆様の目線でも考えないといけないなと感じました。

パ：インパクトも大事じゃが、見る人の受け取りやすさや見やすさなども大事じゃな。深いのう～！

これから展覧会の情報を見る時は、デザインにも注目してしまうこと間違いなし！ですね。

（野島 愛子 / のじま あいこ・デザイナー
市野 悦子 / いちの えつこ・非常勤学芸員）



▲左が「浮世絵☆忠臣蔵」展のチラシ、右が没案

